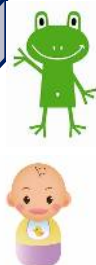


神戸医療産業都市・メディカルクラスターマップ



5 チャイルド・ケモ・ハウス



小児がん治療中の子どもたちとその家族の QOL (Quality Of Life - 生活の質) に配慮した日本で初めての専門治療施設です。
「チャイルド・ケモ・ハウス」では、自分の家のような環境で家族が共に暮らしながら小児がん患者が安心して化学療法（抗がん剤治療）を受けることができます。専門施設では医療機関と連携して、小児がんと診断された患児の化学療法をおこないます。

6 伊藤忠メディカルプラザ



心臓外科医松田先生が、指導監修



心臓の動きのシミュレータを用いた、看護師研修が行われています。

伊藤忠商事株式会社の寄付金によって整備され、2014年10月に開業。国際医療交流、人材育成事業、研究開発事業等の新たな事業機会を創出し、更には海外への情報発信、技術移転や人材交流を促進し、よって神戸の更なる経済成長や一層の国際都市化に貢献することを目的とした施設。

(公) 神戸国際医療交流財団 (松田理事長) によって管理運営される。

7 神戸国際フロンティア・メディカルセンター (KIFMEC)



田中院長始め、医療スタッフの皆さん



昨年末、KIFMECで生体肝移植（お父さんから移植）手術を受け、元気に食事のインドネシアのリウちゃん。

KIFMECは、神戸市がすすめるアジアのメディカルセンターを見据え、肝臓病及び消化器病の高度な先端医療サービスを提供する施設として2014年11月に開業。120床の病床のうち20床を生体肝移植用とし、国内患者を優先しながら、海外からの患者を受け入れる。他の100床は消化器系の癌や肝臓病の内視鏡治療などに対応する。

院長の元京都大学医学部付属病院長の田中紘一先生は、中東やアジアなどで技術指導した経験を生かし、既にサウジアラビア政府との間で医師らの交流プログラムを進めるなど、医療の国際ネットワークづくりを進めている。

4 医療と介護の連携の充実について

質問：垂水区で医療と介護の連携会議に参加されている先生から「かかりつけ医を持っていない市民が多くなっている。」ことが課題と指摘されました。

かかりつけ医を持つことで、家族で付き合いができれば、介護の相談も患者や家族に寄り添い、一緒になって考えてもらえるのではないのでしょうか、ご見解を伺います。また、医師や看護師、介護福祉士等が1人の患者に対して、診療、服薬、介護の情報を共有できるITシステムの導入が必要と思いますが、ご見解を伺います。

答弁：医療介護の連携を図る上では、かかりつけ医は重要だが、現実には市民のアンケートでは、かかりつけ医を持っていない人が約4割であった。地域包括ケアシステムの構築に向けて取り組む中で、かかりつけ医の普及の方策について、新たな方法も含めて検討していく。

ITを活用した情報共有については、国の動向や他の自治体の動きなどもよく注視しながら、今後、医療と介護の関係者とよく協働し、具体化について検討していきたい。

5 障がい者の地域移行支援について

質問：グループホーム設置の規制緩和や公営住宅の活用、地域の理解を得るための方策、在宅支援サービスの充実、24時間訪問できる緊急対応サービスなどについて、どのように課題解決を図っていくのか伺います。

答弁：○廊下、階段の幅についての設置基準を緩和するよう改正された建築安全条例が、H27年1月より施行する。まだ残っている法律上の規制についても、引き続き国に要望していく。○地域住民の理解の促進をはかるため、各区で、バザー、フォーラム等の啓発事業を行っている。○在宅支援サービスをさらに充実させ、個々の障害者のニーズにあった支援が実施できるようにしていく必要がある。○障害者地域生活支援センターでは24時間対応で相談に応じている。

要望：現在は相談のみであるため、特に精神障害をお持ちの方の場合は、自宅に看護師が訪問することが大切。看護協会が実施している、離職されている看護師を再度研修する事業などをバックアップして、看護師の体制を強化していただきたい。

6 未来創造都市のシンボルとなる事業について

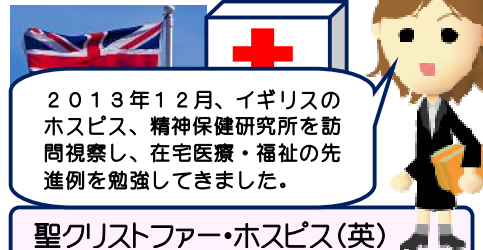
神戸ワインの新酒の祭りは、農業公園で行われているため、車で行くことになり試飲できないので、日本酒の利き酒会やパンやスイーツの試食会も含めて東遊園地の活用を提案しました。

7 神戸からの発信・国際貢献について

質問：震災をきっかけに、カンボジアで救急・救命の指導をボランティアで続けている団体があります。神戸の国際貢献活動として、支援できないですか？

答弁：今後、先方のニーズを伺いながら、助言や人材育成のための研修受入れなども対応していく。また、車両や資機材の提供についても、引き続き対応していく。震災を経験した本市として、当時の教訓を世界に発信していくことは重要なことと考えている。

また、本市のOBの国際的で熱心な活動に対しては、誇りに思っており、今後もできる限り協力を行っていく。



2013年12月、イギリスのホスピス、精神保健研究所を訪問視察し、在宅医療・福祉の先進例を勉強してきました。

聖クリストファー・ホスピス(英)



シスレー先生によって世界で初めて創設された「ホスピス」現在は、病床だけでなく、自宅から通える、リハビリトレーニングや相談・コミュニケーションのルーム、更に、訪問看護・介護に重点を置いた運営が行われていました。

メリデン・ファミリープログラム(英)



バーミンガムにあるソリハル精神保健研究所が実践している、精神障がい者向けの治療プログラム。通院や外出が困難な患者さんの場合でも、訓練を受けた看護師などが自宅を訪問し、家族を含めてカウンセリング、治療のプログラムを計画・実行します。家族ぐるみで治療を受け、症状が改善・安定した家族にも研修を受けてもらい、次の治療のカウンセラーとして活動してもらうユニークな仕組みで治療の輪が広がっていました。



神戸市消防局OBの正井さんが、カンボジアの消防隊RRC711を指導している様子。

昨年、夏にプノンペン市にオープンしたイオンモールにおいて、RRC711が中心となって消防・防災訓練を実施。